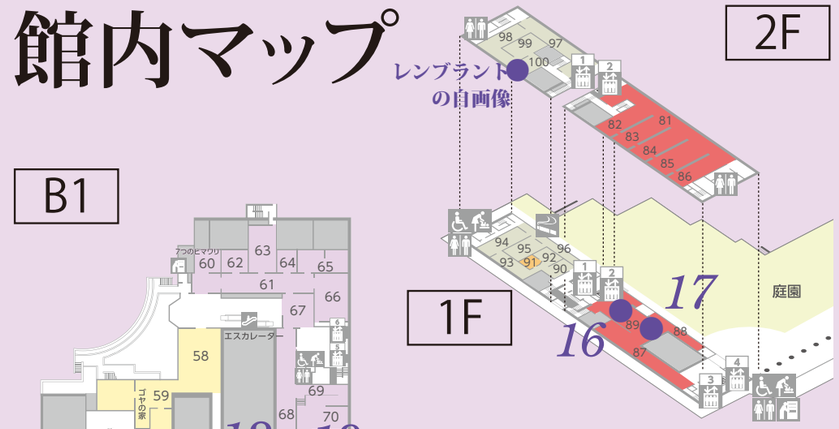
館内マップ



12 こんにちは、ジャポン

ラ・ジャポネーズ

クロード・モネ

モデルはモネの妻カミーユ。扇子はフランス国旗をあしらったデザイン。

B1
1876 年
油彩、カンヴァス
231.6×142.3 ㎝
ボストン美術館
ボストン、アメリカ

この時期、画家を取り巻く世界も近代化の波を受ける。交通網の発展によって、今まで異国と感じられていた文化圏との交流が進んだ。パリへ渡った浮世絵の、輪郭線を生かした表現方法や形のデフォルメ、美しいグラデーションは、フランスにとどまらず、ヨーロッパの画家たちを魅了した。

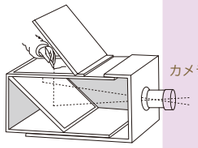
包装紙として陶磁器を包んでいた浮世絵が脚光を浴びる。

11 カメラを使って

真珠の耳飾りの少女（青いターバンの少女）

ヤン・フェルメール

B2
1665-66 年頃
油彩、カンヴァス
44.5×39 ㎝
マウリッツハイス美術館
ハーグ、オランダ



カメラ・オブスクーラの原理
～その一例～

交易で栄えたオランダらしく、異国情緒あふれるターバンをまとっている。

17 世紀に入ると、カメラ・オブスクーラと呼ばれる、カメラの元になった機械を利用して描く画家が多くなった。フェルメールもその一人といわれている。画家たちは、その時代の新しい科学的知見を表現に利用することが多い。

NEXT ↑

13 点描のみずみずしさ

グランド・ジャット島の日曜日の午後

ジョルジュ・スーラ

B1
1884-86 年
油彩、カンヴァス
207.5×308 ㎝
シカゴ美術研究所
シカゴ、アメリカ

補色など色彩の知識が利用されている。

カメラが広まり、絵画の写実性は写真に役割を引き継ぐ。新しい表現が模索される１９世紀、点描画法をスーラが確立した。小さな点の集合を離れて見ると、異なる色の点が混じりあって見えてくる。それはパレットで混ぜ合わせるよりもずっと明るく鮮やかな効果が得られた。

周囲には点描の縁取りがなされている。

14 自然の本質を追究

リンゴとオレンジ

ポール・セザンヌ

B1
1895-1900 年頃
油彩、カンヴァス
74×93 ㎝
オルセー美術館
パリ、フランス

転げ落ちそうな状態のリンゴやオレンジ。しかし、そこには永遠に存在し続ける物の確かさがある。セザンヌの「自然を、球と円錐と円筒として捉える」という考えが、キュビスムといわれる立体の存在感を再構築する運動に影響を与えたといわれている。

人物を描いた作品も見てみよう。人物さえも静物のような、存在感を強調した描き方だ。

15 内面を描く

叫び

エドヴァルト・ムンク

ムンクは友人と歩いている時に「自然を駆け抜けるような大きな、終わることのない叫び」を聞く。その体験に基づいた絵画。欄干以外に直線は皆無で、空も海も大地も、すべてが彼の内面を表すかのように揺れ動いている。

何もかもが揺らいでいる表現は、見る者に不安を与える。ゴッホの「自画像」も見てみよう。

B1
1893 年
テンペラ、油彩、パステル、厚紙
91×73.5 ㎝
オスロ国立美術館
オスロ、ノルウェー

16 戦争の記憶

ゲルニカ

パブロ・ピカソ

illustration

描かれたものからは、どんな感情が読み取れるだろう。

1F
1937 年
油彩、カンヴァス
349×777 ㎝
レイナ・ソフィア国立美術館
マドリード、スペイン

これらにはどういう意味があるのだろうか。

スペインの古都ゲルニカが、無差別爆撃を受けた。それを知ったピカソは、わずか１ヶ月でこの大作を描き上げる。無数の習作やスケッチが残されており、そこには色がつけられたものもあるが、完成した絵画は白、黒、そして灰色。戦争の悲劇をより強く伝えるために、色彩は失われた。画面は悲惨な出来事を暗示する、不穏な表現に満ち溢れ、戦争という残虐な行為に対する強い抗議を表している。

17 アクション（行為）

秋のリズム：No.30

ジャクソン・ポロック

1F
1950 年
油彩、カンヴァス
266.7×525.8 ㎝
メトロポリタン美術館
ニューヨーク、アメリカ

ポロックは、絵の具をたっぷり含んだ筆からカンヴァスに絵の具を垂らすドリッピングという技法を開発した。彼はこの方法によって、自分自身の動き（アクション）を画面に定着させた。立体感を生み出す陰影も、透視図法の中心という概念も排除された画面は、平面という絵画のあり方を再認識させてくれる。奔放（ほんぽう）な色や形が画面の外にまで広がっているようだ。

あなたならどんな方法で自分の動きを表現しますか？

See you !

HiCAM ハイカム

High School Class Art Museum

Hi, Come on!

監修：鳴門教育大学　大学院教授
山木　朝彦
協力：高校教諭
亀井　幸子
制作：大塚国際美術館
武知　直輝
富澤　京子

2011 年 4 月

※写真は大塚国際美術館の展示作品です。

大塚国際美術館
OTSUKA MUSEUM OF ART

HiCAM ハイカム

High School Class Art Museum

Hi, Come on!

大塚国際美術館
OTSUKA MUSEUM OF ART

高校生用鑑賞シート

アートジョイ

a r t

1 ローマ美術の大画面
秘儀の間

床の模様や壁画上部のギリシア雷文などは、今見ても新しい。

B3
前 70－50 年頃
フレスコ（壁画）
間口 494× 奥行 708× 高 474.5 ㎝
秘儀荘
ポンペイ、イタリア

壁に漆喰を塗り、それが乾かないうちに顔料を塗るフレスコ画。
耐久性や顔料の発色も良い。「フレスコ」はイタリア語。英語では「フレッシュ」。

今から２０００年ほど前、ヴェスヴィオ山の噴火により、人も街もすべてが火山灰の中に埋もれたポンペイ。その郊外に建てられた別荘の一室が秘儀の間。辰砂（しんしゃ）を用いた「ポンペイ赤」は保存状態がよく、鮮やかである。壁画全体の内容に関しては、酒と豊穣の神 ディオニュソス（バッカス）の秘儀への入信式、アリアドネの婚礼など、いくつかの解釈がなされている。

2 モザイクは永遠
皇帝ユスティニアヌスと随臣たち

素材の色をそのまま活かせるのもモザイクの特徴。どの部分か見つけてみよう。

B3
547 年
モザイク（壁）
280×400 ㎝
サン・ヴィターレ聖堂
ラヴェンナ、イタリア

ダンテは色彩のシンフォニーと絶賛。クリムトの黄金様式にも影響。

ガラス・石などの小片を貼り付けて表現されるモザイク画。中世においてモザイクは、絵画に比べて傷みが少ないため、皇帝や宗教者の偉業を永遠に残すという目的にも使われた。中でもラヴェンナのモザイクはガラスを用い、金を中心とした色彩の輝きが特徴。

3 聖なる空間
スクロヴェーニ礼拝堂壁画
ジョット・ディ・ボンドーネ

「最後の晩餐」どこに描かれているか探してみよう。

B3 1304-05 年
フレスコ（壁画）
間口 841× 奥行 2090× 高 1265 ㎝
スクロヴェーニ礼拝堂
パドヴァ、イタリア

ジョットはルネサンス絵画の祖。その特徴がわかるのが「最後の晩餐」。中世ではイエス・キリストは中央か左端、裏切り者のユダはテーブルの手前に一人描かれるという、「決められた図像」があった。ところがジョットはテーブルを囲む様子を自然に描く。こうして、現実感のある空間表現が絵画にもたらされた。

4 油彩のきらめき
アルノルフィーニ夫妻の肖像
ヤン・ファン・エイク

鏡に映っているのは二人だけ？

鏡の縁にはイエスの受難の様子が描かれている。

B2
1434 年
油彩、板
81.8×59.7 ㎝
ナショナル・ギャラリー
ロンドン、イギリス

油絵の具を改良した彼は、画家たちの表現の幅を広げたといえよう。この画家は、細密な表現を得意とし、ここでも、鏡や衣装の質感、犬の毛並みなどをうまく表現している。この絵画は、男女が結婚の誓いを立てる場面とされる。犬は「忠実」、履物を脱ぐことは「神聖な場所」を意味するなど、画面に描かれたものには様々な象徴（アトリビュート）がちりばめられている。

5 人間の再生（ルネサンス）
ヴィーナスの誕生
サンドロ・ボッティチェッリ

ヴィーナスのポーズは、メディチ家に伝わる古代彫刻がモデルといわれている。

B2
1485 年頃
テンペラ、カンヴァス
172.5×278.5 ㎝
ウフィツィ美術館
フィレンツェ、イタリア

はっきり描かれた輪郭線。丹念なハッチング（斜線描写）を見ることもできる。

ルネサンスには、都市の経済的な発展を背景に、自由なものの考え方が浸透する。絵画の世界にも、教会の力が強い中世社会では描けなかったギリシア・ローマ時代の神々が復活し、ヴィーナスが再び登場する。教会や王だけでなく、有力な貴族や市民層もパトロンとなることで、画家の活動の場は一挙に広がっていく。例えば、このボッティチェッリは、大富豪メディチ家の一族から援助を受けて活動していた。

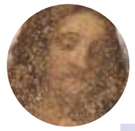
6 よみがえる劇的空間
最後の晩餐《修復前》《修復後》
レオナルド・ダ・ヴィンチ

ゆっくり丁寧に描きたいレオナルドは、フレスコではなくテンペラを選んだ。
その結果として剥落が進み、後世に加筆修復される運命をたどった。

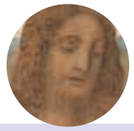
イエスが「この中に私を裏切ろうとしている者がいる」と告げる。その言葉に驚いた弟子たちの顔からは、怒り、疑い、恐れ、諦め、不信などが感じられる。一点透視図法の消失点がイエスのこめかみにあり、すべての動きがイエスを中心に構成されている。目の前に空間が広がっているような、劇的な演出である。

B2 1495-98 年 テンペラ（壁画） 420×910 ㎝
サンタ・マリーア・デッレ・グラーツィエ修道院
ミラノ、イタリア

修復前



修復後



修復には、約 20 年の歳月を要した。
イエスが言葉を発した瞬間を捉えた口元の表現が浮かび上がった。

7 スフマートの輝き
モナ・リザ
レオナルド・ダ・ヴィンチ

遠くなるほどぼかして奥行きを出す空気遠近法が利用されている。

油彩による透明な層を塗り重ねる事で、明暗の階調をつくり出し絵画に豊かな質感をもたらすスフマート。輪郭は消え、微妙な陰影の中に美しい形が現れる。この技法だけでなく人体の解剖から得られた知識や、空気遠近法の利用など、レオナルドは新たなリアリティを絵画にもたらした。

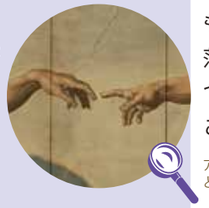
B2
1503-06 年 油彩、板 77×53 ㎝
ルーヴル美術館 パリ、フランス

スフマート技法による輪郭線のない表現。

8 ミケランジェロの偉業
システィーナ礼拝堂天井画および壁画
ミケランジェロ・ブオナローティ

B2 の出窓からも見られる

B3
天井画：1508-12 年
フレスコ
3255×670 ㎝
壁 画：1536-41 年
フレスコ
1463×1338 ㎝
システィーナ礼拝堂
ヴァティカン



アダムの誕生の瞬間。
どこにあるか探してみよう。

教皇は彫刻家ミケランジェロに天井画の制作を命じた。高さは約２０メートル、面積はテニスコート約３面分。足場を組み、仰向けとなる作業は４年にも及ぶ。首や腰は悲鳴をあげ、顔料が落ちるたびに失明の危機が迫ったが、ついに偉業を成し遂げた。彼は「神のごときミケランジェロ」と称えられた。

「ダヴィデ像」
ミケランジェロは彫刻家として名高く、詩人でもあった。

9 光と影
夜警
レンブラント・ファン・レイン

B2 1642 年 油彩、カンヴァス
363×437 ㎝
アムステルダム国立美術館
アムステルダム、オランダ

元々描いたのは昼の様子。表面に塗られたニスの変色により、画面が暗くなり、後世の人たちが「夜警」と呼ぶようになった。

人生の浮き沈みと
表現方法の変化が読み取れる、
2F テーマ展示
「レンブラントの自画像」コーナー。

バロックは「光と影」や「動き」の表現が特徴。ここでは注文主の希望に合わせるのではなく、自らの構想に基づいた身振りや、架空の少女を加える事で、画面にリズムを与えた。さらに光と影によって劇的な印象を受ける。こうした空間の演出は、この時代から現代に至るまで、演劇や映画などでも使われている。

10 謎に満ちた空間
ラス・メニーナス（女官たち）
ディエーゴ・ベラスケス

絵の中の登場人物たちの視線が絡み合う、心理的な空間をうまく表現している。

画中に鏡が描かれた「アルノルフィーニ夫妻の肖像」が、当時、スペインの宮殿にあった。
ベラスケスも意識したのではないだろうか。

B2 1656 年
油彩、カンヴァス
318×276 ㎝
プラド美術館
マドリード、スペイン

絵画の正面に立つと、中央のマルガリータ王女の目線はすこし左にずれているように見える。そして、誰を見ているかは、奥の鏡が教えてくれる。鑑賞者の側にいるのは国王夫妻。ベラスケスは見る者さえも絵の中の登場人物に変えてしまった。

NEXT →